

防災教育の実践について ～環境防災科の取り組みと EARTH 員としての活動～

兵庫県立神戸高等学校
教諭 澤田 一勝

1 はじめに

1995年1月17日午前5時46分、淡路島北部を震源とする巨大地震が兵庫の街を襲った。後に「阪神・淡路大震災」と呼ばれることとなった都市直下型地震は、未曾有の大災害となった。6,434名の尊い命、住んでいる家や街、生活を奪った。しかし、大災害の裏で人々は手を取り合って必死に生き抜いた。その年を「ボランティア元年」と呼び、全国、世界から多くの支援を受けて、復旧・復興に向けて動いていった。



2002年4月、全国で初めて防災を専門に学ぶ学科が、県立舞子高等学校に「環境防災科」として設置された。阪神・淡路大震災以降、命の大切さ・助け合いのすばらしさなど、震災の教訓に学ぶ「新たな防災教育」を推進してきた兵庫県が、高等学校の専門学科で展開しようというものであった。

2005年4月、県立舞子高等学校に赴任した私は、防災教育に携わることとなった。防災教育の授業を通じて生徒と一緒に学び、生徒と一緒に被災地に赴き、また被災地以外でもボランティア活動を実践した。また、防災教育推進指導員養成講座を受講し、2010年、震災・学校支援チーム(EARTH)の一員となった。

2 取組の内容・方法

(1) 2007年3月25日能登半島地震、2007年7月16日中越沖地震、国内において立て続けに大地震が襲い、また海外においても中国・四川、インドネシア・スマトラ島などで大きな被害をもたらす巨大地震が起きた。地震以外でも2009年8月に佐用町を中心に豪雨被害が起きるなど、国内外において自然災害による甚大な被害が起きた。「出来る支援をしたい」そんな生徒の思いから活動が始まった。募金活動、被災地訪問、継続的な支援、交流などがおもな活動内容であった。

(2) 2011年3月11日、午後14時46分、東日本を巨大な地震が襲った。「東日本大震災」。マグニチュード9.0の地震の揺れもそうだが、沿岸部を襲った巨大津波により甚大な被害をもたらした。遠く離れた地の出来事だったが、我が事のように衝撃を受けた。連日報道される被害状況。死者・行方不明者の多さに、被害の大きさを目の当たりにした。「今すぐに出来ることは何か」と考え、まずは募金活動をする事を考えた。場所は地元の垂水駅前ですることにした。募金活動をするために必要な準備がいくつかある。東日本大震災以前も被災地支援のため、募金活動を幾度となく行ってきた。まずは募金活動を行う人員の確保。舞子高校生のほかに、近隣の神戸商業高校、星陵高校、神戸聴覚特別支援学校、多聞東中学校をはじ



め多くの生徒、教職員が春休み中にもかかわらず休みを返上して参加し、ある者は連日、ある者は部活帰りに参加した。部活単位で参加する部もあった。他に準備するものは、道路使用許可書、募金箱、ポスター、被災状況を伝えるビラ、現地の写真など、募金活動を行う上で準備しなければならないものは数多い。道路使用許可書も申請から発効まで5日かかるが、地元垂水警察署も募金活動による申請手続きも理解を示し、迅速に対応していただいている。警察に許可はいただいているものの、活動場所には配慮が必要となる。店先で行えば店の営業妨害になるし、通行の妨げにならない場所を選ばなければならない。かといって人通りが少ない場所だと反応は少ない。大きな声で呼びかけるため、活動時間は1日2時間と決めていたが、住民の方たちにとってのストレスも考えなければならない。当日の活動前には、そういった場所の配慮、近隣の店舗の方々に承諾をいただくことも忘れてはならないことだった。それと、募金活動前後には必ずミーティングを行う。活動前のミーティングでは、活動に際しての注意点の確認、上記に述べたことに加えて、20~30分に一度は休憩をとる。こういった活動の際、頑張りすぎる傾向があるため、教職員やグループリーダーがコントロールしていく必要がある。休憩の取り方も配慮が必要だ。活動時に着用するジャンパーを脱ぎ、水分補給の場所にも気を付ける。他愛のない雑談も、誤解を招く原因にもなった。活動後のミーティングでは、一人ひとり話すようにしている。内容は自分が感じたこと。活動直後にやることに大きな意味がある。10人いれば10個の違った感想が出てくる。そこから学ぶことや考えることも多い。10日ほどで預かった募金は数百万円。金額もそうだが、支援の気持ちの大きさを感じた。小さな子供が恥ずかしそうにお金を握りしめて募金してくれる姿。「今日はバスに乗らず、歩いて帰るからバス代募金するわ。」と言って募金してくれる男性。阪神・淡路大震災で被災者となった神戸市民は、「その時の恩返しを少しでもしたい。」そんな声も多く聞こえた。

舞子高校は同年5月、4週間にわたり宮城県を訪れた。1週間の活動を4つの班が順番に訪問し活動した。私は第3班に同行した。被災状況が正確に伝わらない中、また、余震や原発問題の不安が残る中での訪問となった。まずは準備。活動時に着用する作業着、ヘルメット、マスク、手袋、長靴。作業に必要なスコップ、鍬、土嚢袋。生活に必要な調理道具、食材、シュラフ。現地でも用意していただいたものもあるが、基本的にボランティア活動は自給自足。現地の方に迷惑にならないように大抵のことは準備をして現地に赴いた。現地の方の心の癒しになればと花を持って行った時もあった。この花は、県内の農業高校からの支援によるものだった。個人の準備も含めて出発準備ができ、現地に向かった。丸1日を要し現地に入った。情報では伝わらない現状が、目の前に広がっていた。まずボランティアセンターに行き、作業場所と作業内容を確認した。活動内容は泥かきが主な活動だった。活動場所は、自宅、ビニールハウス、公園、神社の境内など様々だった。津波の被害から1か月以上時間が経過しているにもかかわらず、全く手つかずのところも多かった。津波が押し寄せ、水が引いた後はヘドロが堆積する状態となっていた。堆積の状態は場所によって様々だ



が、10Cm ほど堆積している場所が多かった。それをひたすら土嚢袋に詰めていく。水に浸かった家財道具は使い物にならず、処分するためにゴミ収集場所に運んだ。部活動等でケガをしている者も被災地を訪れた。避難所で生活している方々の話を聞かせていただいた。被災された方からは、この「傾聴」が良かったと伺った。1日の活動が終わったら、必ずミーティングを行った。活動を通じて感じたこと、思ったこと、考えたことをプットアウトし、共有した。

(3) EARTH員として、教職員や高校生に対して防災教育講演、県外教職員対象の防災教育研修会講演、被災地支援。依頼があれば、可能な限り参加させていただいた。基本的には要望に応じていくことを念頭に活動した。主な活動内容は以下の通り。

① 県立高校で高校生対象に講演させていただいた。その中で、「過去の災害」、「今、自分たちの住んでいる町の危険なところ」、「高校生の被災地活動」、「高校生に求められていること」。この流れで話をすると、生徒たちは熱心に話を聞いてくれる。防災教育というと、なかなか興味を持って話を聞いてくれないので、身近な話題から触れると食い付きはいい。高校生の役割は、自分の命を守る行動だけにとどまらない。自分の命を守った後は、周りの人たちのために活動することが必要となる。避難するときには率先避難者とならなければならない。次代へと伝えていく役割も果たしてもらいたい。そんな内容を講演の中では話している。

② 県外での防災教育研修会では、「避難所運営」、「高校生への防災教育のために」など、リクエストの内容を軸に話をしている。その中でも阪神・淡路大震災当時の様子は話している。私自身、阪神淡路を経験していないが、兵庫県に住む者としてこの経験をしっかり伝えている。私自身、震災経験者の話を聞かせていただいたことがあるが、非常に重みのある話だった。しかし、経験のあるなしに関係なく伝えることは、災害大国日本に生活する者として重要なことだと考える。各地で起きている災害を過去のこと、他人事としてではなく「我がこと意識」でとらえる必要がある。



災害対応、対策は様々ある。ハード面の整備も大切である。「備えの大切さ」も災害を教訓に重要視されている。我々教職員の役目は「教育」だと考えている。いくらハード面が整っても、非常持ち出し袋を準備しても、それを扱う人の準備が整っていなければ、無用の長物になりかねない。防災教育を通じてその役目を果たすことが、今後起こる災害に対して自分や他人の命を救う重要な役割を担っているということも、教職員対象の講演では話している。

③ 2016年4月14日、16日に熊本で震度7の巨大地震を2回記録するという地震が起こった。その熊本地震で8月後半に第6陣として被災地に入った。訪れた小学校では、2学期の授業が始まったところだった。授業再開の学校で、教職員や児童のサポートすることが目的だった。現地の小学校は、入れ替わり来るボランティアに嫌気がさしているようだった。支援は決して押し売りではない。求められていることを確実にやる。その意識で活動していると、現地の先生が本音で話して下さった。自分も被災者なのに子供たちのために勉強を教える。仕事は待ってくれない。誰にも頼れない。そんな状況の中で、限界状態になっている先生方もおられた。職員研

修会で心のケアを実践した。ペアワークでやさしい気持ちを送り合うもの。「気持ちが楽になった」という声が聞こえた。

小学校に送られた支援物資。「ランドセルが不足している」その情報に寄せられた2,000個のランドセルの山。実際に



必要なのは数個。情報化社会の広がりによって良い面も多くある反面、このような現実も目の当たりにした。せっかくいただいた支援物資。無下には出来ないと困惑の様子だった。支援の在り方を考えさせられる一面だった。

④ 2018年7月、岡山県で豪雨災害が起きた。7月20日、第1陣で現地に入った。

真備町の菌小学校は避難所となっていた。玄関先には支援物資が山のように届いていた。体育館や教室は避難者で300人程の近隣住民が集まっていた。我々はまず、支援物資の整理をした。非常事態だが平常に近づけていくことが必要となり、学校の早期再開を目指すために整理した。また、そこに配置



されていた先生の人数を減らした。先生方が本来業務を行っていくことが平常に戻っていくことになる。先生方も避難場運営に協力しなければならないが、市役所の担当と先生の役割を確認した。また、避難者にも役割を持たせることにより、この避難所にも自治が生まれる。支援は必要最小限。やりすぎは、避難者の自立を奪うことになる。そうすることが復旧に近づくことになることも伝えた。

3 取組の成果

- (1) 高校生と被災地に赴き活動をしたり、募金活動などを行う被災地支援活動は、大きな成果がある。有志による活動なので、志が高い。高校生の活動は、小さい子供からお年寄りまで対応でき、現地の方々の反応も良い。ただし、活動前の事前学習や、活動後のミーティングも大事にしなければならない。ボランティアは「してあげている」ではなく「させてもらっている」。活動目的はあくまでも被災地支援。学ぶ要素は多くあるが、それは副産物であり主要因ではない。そういったことを理解させる必要がある。ただ、高校生たちは活動を通じて成長している。
- (2) 防災教育講演や研修会での講演についての成果は、その後の追跡調査をしていかないと分からないが、その場での手ごたえは感じている。
- (3) 被災地支援のボランティア活動は、被害状況やタイミングによって活動内容は大きく変わってくるが、活動の成果は十分感じている。上記にも述べているように、決して自己満足な活動にならず、求められていることに応える活動を意識し、おせっかいにならないようにする必要がある。また、支援をすることが現地の方たちの自立を妨げとならないようにすることも意識しなければならない。

4 課題及び今後の取組の方向

一過性で終わってしまっただけでは根付いていかないと思う。研修会や講演は一つのきっかけに過ぎない。あとは現場の先生方が、学校の実情に合った形で実践されることが必要となってくる。「学校安全」や「防災教育」を特別な学習活動としてとらえずぎると定着していくことが難しい。各教科や学校行事の中にもうまく落とし込めると、持続可能な形

を作りやすいと考える。いずれにせよ、担当者任せになりがちな現状を変えていき、皆がいかにか「我がこと意識」でとらえるかが重要になると思う。

防災教育を専門に学ぶ学科が兵庫県以外にもでき、またEARTHのような組織が他県にもできたと聞く。非常に喜ばしい反面、我々は災害の多い国に住んでいることを自覚しなければならない。その意識があれば、防災や減災、被災地支援活動が行われていくだろう。私自身も可能な限り、被災地支援活動や防災教育講演をしていこうと思っている。ただし、授業のフォローなど後方支援の協力あってこそその活動ということをお忘れず、感謝して活動していきたい。